

《研究成果の概要》 1. 当初予定からの変更

当初の在外研究予定期間は2020年9月3日から2021年9月2日までの丸1年間であり、主な研修・研究内容は、自閉スペクトラム症が背景にある社会的ひきこもりや家庭内暴力などへの早期介入のために、自閉スペクトラム症のアセスメントと心理療法の最先端を学び研究することだった。

ところが新型コロナウイルス感染拡大により状況は瞬く間に一変した。国境を越えての自由な往来が制限され、どの国も国内における外出すらままならなくなった。そうした状況のため当該在外研究の予定も二転三転した。最終的には、まだまだ本来であれば渡航不可能と考えられる状況の中、多くの方々のご尽力により2021年6月1日から9月2日まで在外研究をできることとなった。在外研究期間中も入国後の自主隔離や度々のウィルス検査、対面での活動の制限など様々な制約はあったが、逆にこうした状況だからこそその思わぬ恩恵もたくさん教授した。これらの恩恵が研究テーマにも大きな影響を与えたため、ここでそれらを紹介し整理しておきたい。

1つ目は研修機関で手配してくれるメンターを、従来の2人から4人に増やしていただいたということである。これは研修期間が当初予定よりかなり短くなったことや、対面での活動が制限されてしまうことからの、研修機関からの格別のご配慮だった。もともと予定だった2人のメンターは、自閉スペクトラム特性の実行機能の研究やきょうだい児研究で世界的に著名で数々の賞も受賞しているDr. Ozonoffと、自閉スペクトラム症のアセスメントと早期介入の世界的スペシャリストかつトレーナーのDr. Dufekだった。この2人だけでも十分に世界レベルの研究と実践の体験ができるのに、さらに第二メンターとして、自閉スペクトラム特性との関連が様々に研究されている脆弱X症候群の世界的権威Dr. Hagermanと、学校を始めとするコミュニティとの協働実践でたいへん著名なDr. Stahmerの二人を手配してくださったのである。これにより当該研究テーマに、遺伝的要因への介入と産学官民連携の二つの視点が加わることとなった。2つ目は第一メンターのDr. DufekとDr. Ozonoff、そしてプログラムマネージャーのMiller氏が、それぞれ個別に週1回定期的に面談の時間を設けてくださったことである。私が一人異国の地で部屋に閉じこもりがちになることを心配してくれたのだと想像する。これにより研究や実践に関する様々な疑問を具体的に尋ねることができたことはもちろん、お三方の臨床感など哲学にも触れることができた。3つ目はメンターをはじめとする全関係者が、さらに他の実践家や研究家を紹介してくれたことである。限られた時間の中で、少しでも多く、様々な機会を持つようにとのご配慮だった。トラウマがある子どもへの集中的治療であるPCITの実践家たち、ADHDの世界レベルの研究者たち、脆弱X症候群の遺伝子検査のスペシャリスト、この分野のソーシャルワーカーのスペシャリスト、などと出会うことができ、研究テーマを俯瞰し再構築するための素晴らしい機会となった。4つ目は感染拡大の中、手探りで実施されているオンラインでの診療、アセスメント、介入とそれらの検証を、リアルタイムで見学することができ、ディスカッションにも参加させていただいたことである。オンラインのメリットやデメリットを整理する貴重な機会となった。

2. 研修・研究のまとめと発表

オンラインによる自閉スペクトラム症のアセスメントと介入について文献レビューを行っている。メリットやデメリット、また、対面との組み合わせの可能性などについて考察を加える予定である。

3. 今後の研究へ展望

テーマ：オンラインと対面を組み合わせた、自閉スペクトラム症が背景にある社会的ひきこもり、家庭内暴力、依存など行動の問題への発生予防と早期介入

- 1) 超早期支援：日本では子どもの発達特性についての早期発見・早期支援の体制が構築されているが、超早期に微細なサインの折れ線型退行を示す自閉スペクトラム症の一群があり決して稀ではないことや、脆弱X症候群のアセスメントや支援については認知度が低く研究もほとんどされていない。加えてパンデミックにより家族が専門家にアクセスできる機会もより限定的になってしまっている。早期発見・早期支援が予後に影響することは多くの研究が示している。そこでオンラインと対面を組み合わせるとともに、折れ線型退行と脆弱X症候群をフォローできる体制のモデルを構築するとともに、その経過で得られた疫学データを集計し報告する。
- 2) 子ども期の支援：科学的根拠に裏打ちされた優れた介入プログラムや家族支援の手法がいくつか存在するが、いずれも対面支援におけるデータであり、オンラインについてのデータはほとんどない。家族のニーズを基にオンラインと対面を組み合わせた介入を行い、効果検証を行う。
- 3) 大人期以降の支援：2) と同じスキームであるが本人の年齢によりプログラム内容が異なる。